

● 教育講座／イブニングセミナー

2. 医療コミュニケーションの学習

—心身医学と臨床薬理学を専攻する医師の立場から—

大分大学医学部創薬育薬医療コミュニケーション・国際医療福祉大学大学院

中野 重行

医療の基本構造

私は内科医として医師の生活をスタートし、その後、心身医学を学び、臨床薬理学の領域で長年仕事をしてきました。現在は医療コミュニケーションの領域にも携わっています。医療は、不幸にして疾患を患い病んでいる患者を楽にしてあげたいという、人間としてのごく自然な気持ちから生まれたものだと思います。したがって、医療の基本には人間と人間のソフトな関係があります。その上に立って、薬物や医療機器などといったハードなものを、どのようにして患者のために有効に使うか、という人間の営みが加わっています。つまり、医療は、医療者と患者といったソフトなもの、医薬品（薬物）や医療機器といったハードなものを三つの基本要素として成り立つ三角形の関係からできあがっていると理解するとわかりやすいと思います（図1）。

この図の「医療者と患者のあいだの関係」の部分では、本日のテーマとなっている「医療コミュニケーション」がキーワードになります。その上に立って、薬物やその使い方に関するエビデンスを、個々の患者に対して「個別化」して使います。個々の患者にもっとも適した使い方をする点がポイントになります。本当に薬物が効くかどうか（有効性）、安全かどうか（安全性）、あるいは最適な使い方についてのエビデンスをつくるプロセスは、「標準化」のプロセスです。つまり、「個別化」と「標準化」のプロセスはサイエンスが比較的得意としている領域です。サイエンスはものを見えるようにして扱

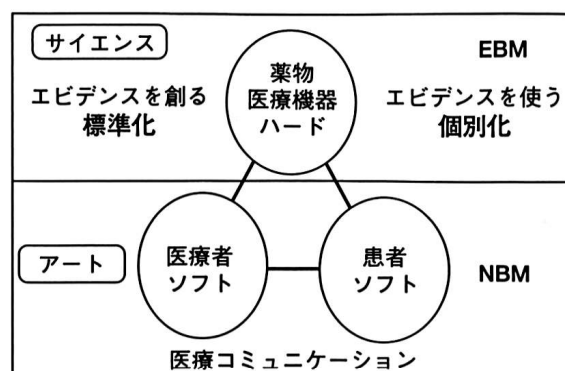


図1 医療の基本構造

ますので、見えないものも見えるようにするいろいろな工夫をします。そこで、しばしば「数量化」が行われます。このような「サイエンス」の網ですくいあげたとき、その網の目から下に落ちていくもののなかに、とても重要なエキスのようなものが含まれています。どんなに網の目を小さくしてすくいあげようとしても、下に落ちていくとても重要なものがありますが、それをここでは「アート」と名づけておきたいと思います。そうすると、「医療におけるサイエンスとアート」の構造が浮かびあがってきます。サイエンスの部分のキーワードは「evidence-based medicine (EBM)」です。アートの部分のキーワードは「narrative-based medicine (NBM)」です。この二つが補い合って、調和がとれるとよい医療になってきます。このNBMのベースとなっているのが医療コミュニケーションです。

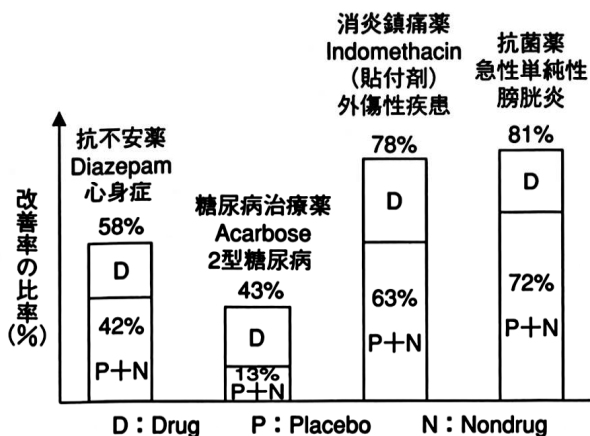


図2 薬物の効果の構造的な理解

治療効果に影響する非薬物要因

薬物治療では、投与量、投与間隔、投与方法を個々の患者に個別化して調節しながら薬物を使用しますが、治療効果には、薬物以外のいろいろな要因が影響してきます。薬効評価のための臨床試験では、コントロール群（対照群）としてプラセボを使うことがしばしばありますが、そのプラセボ投与群の改善率には、種々の非薬物要因が働いています。たとえばわが国の私が関与した治験で、薬理活性のないプラセボ投与群の改善率は、相対的に高いことが認められています。北海道大学から鹿児島大学まで多施設で実施した内科領域の心身症の治験では、プラセボ投与群の改善率が42%で、代表的な抗不安薬であるジアゼパム投与群の改善率は58%でした。つまり、抗不安薬のジアゼパムは、16%の上乗せ効果をもたらしているにすぎません。さらに、このときのプラセボ投与群の改善率は、医師と患者の信頼関係がよいかどうかによって大きく変わってきます。つまり、プラセボ投与群の改善率は、医師-患者間の信頼関係がよいと改善率が高く、信頼関係がよくないとプラセボだけでなく抗不安薬の効果も低下します。

プラセボ投与群にみられる改善は、生命現象そのものといってもよいと思います。薬物治療は生体が本来有している「自然治癒力」があつてはじめて成り立つことを、これらのデータは示しています。図2は薬物投与時にみられる改善の中身を構造的に表したものです。先ほどの心身症のケースでは、P (Placebo: プラセボ) と N (自然変動, 自然治癒) をあわせた改善率が42%で、抗不安薬のジアゼパ

ムはそれに16%の上乗せをしているということになります。2型糖尿病、外傷性疾患、急性単純性膀胱炎などの疾患でも同様の構造になっています。薬物投与時に58%の改善がみられたとき、私どもはこの薬物で58%効く、つまりこの薬物が58%の改善率をもたらしている、というように単純に考えがちで、また製薬企業もそのような表現をしがちです。いまお話しした図からわかっていたかと思いますが、この表現は正しくはありません。実際の治療においては、PとNの部分をいかに大きくするかということが、治療の成功のキーになってきます。医療コミュニケーションのあり方は、患者と医療者のあいだの信頼関係に決定的な影響を与えます。したがって、医療コミュニケーションの学習あるいは教育は、とても重要なテーマなのです。

模擬患者と医療コミュニケーション

大分で模擬患者 (simulated patient: SP) の勉強会を2001年に設立した当時は、私は大分医科大学 (現大分大学医学部) の医療コミュニケーション教育の責任者を務めていました。森照明先生や前田純子さん、医学生の方々に協力していただき開始し、10年がたちました。この勉強会から、響き合いネットワーク大分、響き合いネットワーク東京、ひびきあいネットワーク長崎、響き合いネットワーク山形、響き合いネットワーク湯布院が次々と誕生し、活動を継続して行っております。また、岡山のSP研究会は2008年に「NPO法人響き合いネットワーク・岡山SP研究会」になりました。2010年にはこの六つの地域の活動の協力関係を促進するために「響き合いネットワーク連絡協議会」(理事長: 中野重行) が結成されました。

模擬患者は「標準模擬患者」と「模擬患者」に分類されています。実際には、模擬患者のなかに標準模擬患者が含まれるのですが、私は「自由模擬患者」と「標準模擬患者」という分類をしています。模擬患者のシナリオを忠実に演ずるという「正確度の軸」(縦軸)と感情表現を自由に行うという「自由度の軸」(横軸)で整理するとわかりやすいと思います(図3)。模擬患者のなかで、「標準模擬患者」以外の模擬患者を「自由模擬患者」とよぶとわかり

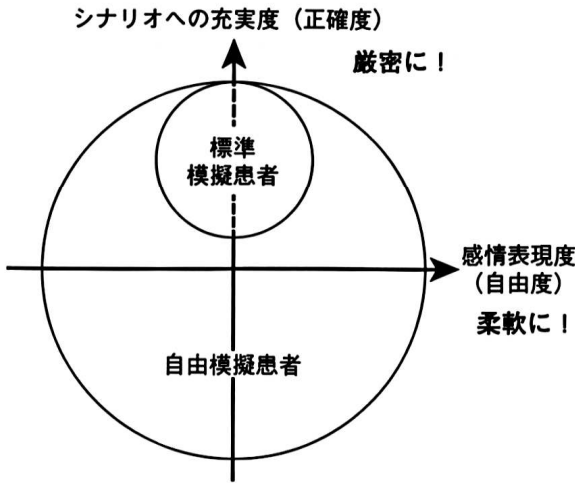


図3 模擬患者の分類と構造

やすいと思います。

医学部における医療コミュニケーション教育の場に必要な模擬患者は、臨床実習に入るまえのOSCE (objective structured clinical examination: 客観的臨床能力試験) では標準模擬患者、臨床実習終了後のアドバンスOSCEでも標準模擬患者、研修医になったあとの医療コミュニケーション教育の場では自由模擬患者です。とくに研修医を対象にした医療コミュニケーション教育では、模擬患者の方々に種々の「むずかしい患者」を演じてもらい、「このような患者にはどのように対応したらよいか」を皆でディスカッションする時間をもつようにしています。

「型(かた)」に「血(ち)」を通わせて、自分の「形(かたち)」をつくる

医学生が臨床実習に入るまえには、医療コミュニケーションを学び、客観的スキル評価をするOSCEが実施されます。この段階は基本的な「型」を身につける段階です。「型」を身につけただけでは、まだ実際には不十分であって、その「型(かた)」に自分の「血(ち)」を通わせて、自分の「形(かたち)」をつくるのが重要なのです。「血」は「心」のことです。学生のときには、基本となる「型」を早く身につけたほうが、その後の成長が容易になるように思います。「型」の段階でとどまっていると、マニュアル的な対応になってしまい、実際の臨床の場では役に立ちません。

コミュニケーションは「双方の情報を互いに共有しようとするプロセスである」と理解すると、自分

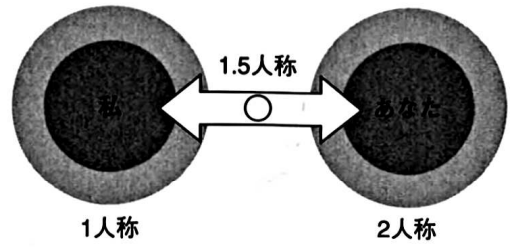


図4 やわらかな1.5人称

がこれから何をしたらよいか分かりやすくなります。ここでは、①双方が情報をもっていること、②双方の情報を共有しようとする気持ちがあること、③時間の経過とともに双方に共有される情報が増えていくこと、の三つが重要なことがわかります。

「やわらかな1.5人称」という私どもが目指したいビジョン

「やわらかな1.5人称」という私どもが求めるビジョンは、響き合いネットワーク大分のワークショップ(豊の国医療コミュニケーションの集い)の場で生まれました。医療の専門家として「1人称」の立場でありながらも、「2人称」である患者の立場、あるいは患者の気持ちに寄り添うことができるというイメージです。「1人称」と「2人称」のあいだを行き来できて、平均すると抽象的な概念ですが「1.5人称」となるような「やわらかな」姿勢を目指すという意味です(図4)。

1人称である「私」のまわりには専門用語がたくさんあります。専門用語で私どもは医療の知識を身につけ、試験を受け、お互いに仲間同士コミュニケーションをしています。一方、2人称の「あなた」である患者は、自分を主人公とする物語の中で生きています。病気もその自分を主人公とする物語のなかのエピソードとして存在しているわけです。目の前にいる患者の気持ちに寄り添いながらも、自分の専門領域にもしっかりと根を下ろしている。これを抽象的な言葉で表して、「やわらかな1.5人称」というコンセプトが誕生したのです。また、このような図のように、わかりやすいビジュアルにしてコンセプトや情報を共有することがとても重要だと思います。このような工夫もコミュニケーションの重要なポイントになります。